

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

第30号 / 令和5年6月29日発行

寺子屋、藩校、昌平黌 —学び舎の歴史、江戸から東京へ—	2
収蔵庫と天気	4
卒業写真に写る人たち	6
令和4年度のあゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8



▲絵はがき「(新大東京名所) 机上ヨリ見タル聖橋及ニコライ堂附近」

寺子屋、藩校、昌平黌^{こう} —学び舎の歴史、江戸から東京へ—

徳川幕府の学び舎

JR 御茶ノ水駅のプラットフォームから、かつての江戸城外堀、現在の神田川越しに北側の文京区域を遠望すると、緑豊かな一画が視界に広がります。この場所は、江戸時代当時から『江戸名所図会』や錦絵などに描かれ、およそ330年に亘って、この地の景観を特色づけてきました。

元禄3年（1690）、上野忍岡の林家の私邸にあった孔子廟^{びょう}が、ここ湯島に移設され“聖堂”と呼ばれるようになりました。その後の複数度に及ぶ増改築や敷地の拡充を経て、寛政11年（1799）に、幕府直轄の昌平坂学問所（昌平黌）となり、現在の史跡・湯島聖堂へと至っています。

徳川幕府瓦解後、明治年間以降は一時期、文部省が置かれ、明治5年（1872）に日本初の博覧会の会場となっています。



湯島聖堂で開催された日本初の博覧会の様子（当館所蔵）

庶民の学び舎

現在のような教育基本法その他の関連法規もなければ、小中学校も存在せず、教育が義務化されてはいなかった江戸時代当時、庶民の子ども達の学びの場を担っていたのは、私塾としての寺子屋でした。ここでは主に、「往来物」などと呼ばれる書物で文字の読み書きを、そろばんなどを用いて算術を学びました。

寺子屋は年齢別の区分けもなく、等しく同じ教育を受ける中で、子どもから大人へと成長してゆく過程で、人格形成や対人関係も学ぶ場であったものと思われます。

明治初年に東京市内の寺子屋を確認する以前、江戸時代には統計学という概念がなかったため、江戸の町全体で、どれ位の数の寺子屋が存在したのかは不明です。

そももちろん識字率に関する統計資料もありませんが、一定程度の教育水準にあったのではないかと思います。

日本各地の神社仏閣に奉納された絵馬などには、“和算”と呼ばれる、現代の三角関数や連立方程式に該当するような、高等数学の問題や解答を記したのものがあり、一部では高水準の知識を持つ市井の人々がいたことも理解されます。

武家の学び舎

一方、武家と呼ばれる階層の人々は、例えば、大名の藩士の子弟達は、それぞれの大名家が国元に設けた藩校と呼ばれる学校施設で学ぶことが一般的でした。

試みに、現在の文京区域に所在した大名家の藩校をいくつか見てみます。徳川御三家の一画を担った親藩、水戸徳川家は弘道館、藩主が老中などを務めた福山藩の阿部家は誠之館、百万石を誇った外様の雄藩、加賀藩前田家の明倫堂、そして五代将軍の寵臣として知られる、柳沢吉保を初代藩主とする大和郡山藩には造士館と、各々の藩の国元に設けられた藩校で、それぞれ人材を輩出してきました。

大名家の藩士ではない、幕府直参^{じきさん}の旗本や御家人といった階層の武家の子弟達、あるいは各藩の藩士でも、受け入れが許された者は、冒頭に挙げた昌平黌に学ぶことも可能でした。昌平黌における主たる教育は、孔子という思想家を始祖とする、古代中国に由来する思想の一つ、儒教の教義を基とするもので、“朱子学”などとも呼ばれました。

西洋諸国との交流が行われる以前の日本は、中国大陸や經由地となった朝鮮半島から、当時の最新の技術や文化、思想を受け入れていました。日本の衣食住の根幹となった水稲耕作の方法や陶磁器の製作技術の習得、“漢字”文化も中国に由来するものです。後に“和魂漢才”と呼ばれた中国大陸由来の知識や技術の導入は、遥かなる紀元前から江戸時代まで連続と続いています。

和魂洋才の時代

明治維新を機に欧米諸国との交流が拡充し、様々な文化や技術、知識を受容する過程で次第に、“和魂漢才”が“和魂洋才”へと変容してゆきました。

欧米由来の服飾品を身に着け、髷^{まげ}を下ろし、徐々に洋風的生活様式が日本社会に浸透してゆきました。

余談ながら明治年間初期に帝国大学などで高等教育を学び、西洋への留学を果たした文化人や研究者の中には、和魂洋才に馴染めずに、葛藤^{かつとう}と煩悶^{はんもん}とを繰り返した人もいます。近代日本文学の金字塔を打ち立てた夏目漱石も、その一人です。英国留学中の漱石を訪問した知人から、明治政府あてに伝達された「夏目、発狂ス」の報は有名です。



国史跡・湯島聖堂の孔子像

明治年間以降の湯島聖堂

湯島聖堂は日本の教育史上の淵源たる歴史と文化を持つ一方、欧米諸国由来の知識や技術が普及するにつれ、明治～大正年間には一時期、荒廃していた様子が、荷風・永井壮吉の随筆『日和下駄 一名東京散策記』に記されています。

大正11年（1922）には、旧法である史蹟名勝天然紀念物保存法に基づき国史蹟として指定された、貴重な文化施設です。ところが翌、大正12年9月に関東大震災時によって罹災、水屋や杏壇門の一部を除き灰塵に帰してしまいました。

これを今日ある状態に復興・整備したのが“聖堂復興期成会”の名で組織された団体です。団体を構成した主要な人物についてみてみれば、財界からは渋沢栄一、教育界からは嘉納治五郎、政界からは徳川家達など、錚々たる面子が名を連ねています。現在は、公益財団法人・斯文会により管理・運営されています。



『新撰東京名所図会』（当館所蔵）に描かれた「湯島聖堂」

“儒者捨て場”から国指定史跡へ

徳川幕府の祈祷寺として栄え、明治維新後は、明治政府の高官や公家をはじめとする政財界人などの新興富裕層の菩提寺となった護国寺。その東側に隣接して護持院（明治元年に廃寺）が所在していました。護持院跡地は現在、皇族の集団墓所“豊島岡墓地”となっています（非公開）。その敷地東側に隣接して、湯島聖堂と深い関わりのある、国指定史跡が存在します。それは昌平黌などで儒教を講じた人々の集団墓地“大塚先儒墓所”です。この地は元、水戸徳川家に仕えた儒者、人見道生の私邸であったと言われています。

人見の死後、その遺体が埋葬された事に始まり、人見の人徳を慕う室鳩巢が死後、埋葬され、更に古賀精里や尾藤二州、柴野栗山、岡田寒泉、そして木下順庵と、儒者たちが相次いで埋葬されるようになり、各々の縁者（幕府儒官や親族）たちの集団墓所となっていきました。しかしながら明治9年（1876）頃には既に、尾藤・古賀両家の親族を除く他家の子孫の所在が不明の無縁仏となり、そして一時期は管理する人々もいなくなってしまい、“儒者捨て場”と呼ばれるほどに荒廃を極めていたとも伝えられています。

こうした荒廃ぶりを見かねた人々が危機感を抱き、明治34年、帝国大学総長であった浜尾新らが発起人となり、“大塚先儒墓所保存会”が設立されました。その後、寄附を募り土地を購入し、大正4年に発起人総代、渋沢栄一名義で、東京市（現在の東京都）に寄附されます。大正6年10月には東京帝国大学から東京市に対して管理に関する申入れも行われ、翌年11月に承認されたことを受け、大塚先儒墓所保存会は解散しました。大正10年に史蹟名勝天然紀念物保存法により国の史蹟に指定され、戦後は文化財保護法による国史跡に引き継がれました。文京区内で最も古い時期に国指定となった文化財の一つです。

チュウタが奏でる“怪獣の花唄”

伊東忠太は、慶応3年（1867）に、出羽国米沢藩の藩医・伊東祐順の次男として生誕しました。明治6年に、明治政府の軍医となった父に随い米沢の地を離れました。

第一高等中学校（現在の東京大学教養学部）を経て、明治25年、帝国大学工科大学造家学科（現在の東京大学大学院工学系研究科）を卒業しました。ジョサイア・コンドルや辰野金吾に師事し、大学院修了後には外遊などを経て明治38年に東京帝国大学教授となりました。

法隆寺が現存する最古の木造建築であることを確認、それまで“造家”と訳されていた Architecture を“建築”に統一するなど、伊東が建築学で果たした業績に加え、出色の逸話は伊東の遺した怪獣たちです。伊東は自らの設計した建築の意匠として怪獣や神獣、魑魅魍魎たちを配しました。

ここ湯島聖堂にも、建物の随所に様々な姿の神獣たちが潜んでいます。一体何種の神獣たちがいるか探するのも一興でしょう。



湯島聖堂大成殿の神獣(鬼龍子)



湯島聖堂入徳門の神獣

令和5年度は国史跡・湯島聖堂その他を会場として開催される「第20回全国藩校サミット文京大会」の一環として、文京区アカデミー推進課の企画展示『ぶんきょうの学び舎展～昌平坂学問所が未来に紡ぐもの～』との共通テーマの元、特別展『湯島の地に聖堂ありー江戸・東京の学び舎と文京』を開催します。ご来館をお待ちしています。（加藤元信）

収蔵庫と天気

文京ふるさと歴史館では、多くの資料を収集し、保存しています。絵画、古文書、写真、民具など様々な物が収蔵庫にはあります。これらの資料の中には、天気と関わりのある資料もあります。博物館の収蔵庫と天気、繋がりが無いようにも思えますが、探してみると意外に見つかります。

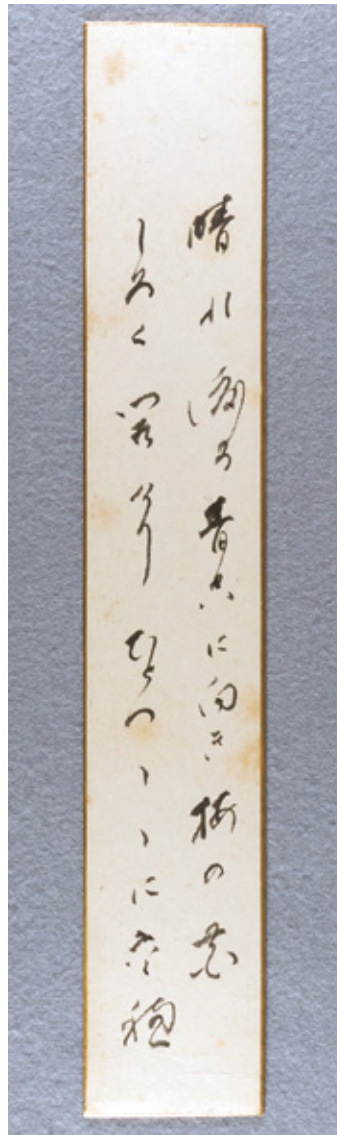
窪

田空穂は、長く文京区内に住んだ歌人で、早稲田大学で教鞭を取っていました。【図1】は、空穂が詠んだ歌の短冊です。

晴れ渡る青空に向き梅の花しろく開けりひとつゝに

これは歌集『鏡葉』の中の一詩で、大正14年（1925）に詠まれました。『鏡葉』は、大正10年から14年までの歌を集めた歌集で、空穂は大正9年から始まった大学勤めをしながら、長男が肋膜炎にかかる、関東大震災が発生するなど、「かなり心あわただしい生活をしてみたあひだのものである。」と巻末に記しています。

この歌の詞書には、「我も罹りて癒えんとする頃に」とあります。その前の歌の詞書は「子、流行感冒にかかる」とあり、「寝かされてみる弟に童話読みわかるやときく読みさして兄」と詠んでいます。この時、次男と空穂は、インフルエンザにかかっていたようです。歌人で、のちに早稲田大学名誉教授となる長男の章一郎は、のちに著書『短歌シリーズ人と作品5 窪田空穂』「秀歌鑑賞編」に、この「晴れ渡る…」の歌を選んでいました。



【図1】 空穂の短冊

根

津権現の驟雨^{しゅうう}（【図2】）は、昭和11年（1936）に発行された小泉癸巳男（1893-1945）の版画で、「昭和大東京百図絵」の中の1枚です。昭和5年「昭和東京風景版画百図絵頒布会趣意」からは、このシリーズを制作する契機などがわかります。

さて、千九百二十三年の九月、自然の革命者は、偉大な暴威を以て、広重や北斎の残した江戸風景から、清親の明治風景まで容赦なく破壊してしまひました。

千九百三十年には、実に吾々すら夢想だにもしなかつたモダン新風景を復興の東京は実現させました。…現代人の私達も此のよき復興の東京を時代に応しい表現と手段により、版画情調として記念したいと思ひます。

「昭和大東京百図絵」は、昭和5年から12年まで制作され、大正12年（1923）の関東大震災後の東京が描かれています。小泉は復興した町並みを版画で表現して、その様子を伝え残そうと考えていたようです。

根津権現の驟雨は、昭和11年9月、81番目に制作されました。小泉は、この絵について「昭和大東京百図絵版画制作目録二」に、「国宝のお社の青銅は美しく境内は荒れて淋しく」と書いています。急に雨が降ってきたのか、子どもや大人が楼門の下で雨宿りをし、その後ろには「美しい」とされた社殿が見えます。



【図2】 根津権現の驟雨

高崎屋は、江戸時代から続く商家です。江戸時代には、「江戸一」というお酒を販売していました。慶応元年（1865）の『俗事百工起源』という本に、「^{しよんしょう}猩々も酒のうまみは江戸一とのめや唄へや汲めやくめ〜」と江戸一を売り始めたとあります。「猩々」は、お酒が好きな想像上の動物、あるいはお酒好きの人ともされます。「江戸一」は評判が良く売れたようです。また、明治40年（1907）発行の『新撰東京名所図会』にも、高崎屋が紹介されています。

酒類醤油商高崎屋は駒込東片町八番地にあり。旧家にて其名知られたり、…此地中仙道奥州道との岐るゝ所にして、方今猶ほ追分と称せり。

明治になっても、よく知られたお店であったことがわかります。

【図3】のガラス製の徳利は、高崎屋から寄贈されたものです。徳利の下の部分が、くもりガラスになっています。くもりガラスは、食器のほか窓などにも使用されます。ガラスの表面を金剛砂や金属ブラシで傷つける、または、薬品で腐食させて不透明に加工したもので、すりガラスとも呼ばれます。通常のガラスと違い、くもっていることで視線をさえぎり、透る光を柔らかくします。ただし、くもりガラスは水に濡れると透明度が増し、通常のガラスに近くなります。



【図3】くもりガラス製の徳利

歌川広重の『絵本江戸土産』は全10篇、嘉永3年（1850）から慶応3年（1867）にかけて刊行されました。初篇から第7篇までは、初代広重、第8篇から第10篇は二代広重によって描かれました。見開きの名所の絵の中に、簡単な文章でその名所の説明があります。【図4】「湯島天神 雪中之図」は、『絵本江戸土産』第5篇に収められ、雪の積もる湯島天満宮境内を男坂の方から眺めた様子を描いています。

むかし太田道灌ぬしの勧請なりといふ。この社地また石階ありて、見はらし神田明神におなじ。別して雪の景色によろしく、境内水茶屋・楊弓等ありて常に賑はへり

絵の中の文章では、湯島天満宮の由来と眺めがよく雪の景色がすばらしいこと、境内が賑わっていると紹介しています。この一帯は、雪見をする場所としても、知られていたようで、『東都歳事記』の11月「看雪」の項にも「湯島台」とあります。

収蔵庫を探すと、本文で紹介したほかにも様々な天気まつわる資料があります。令和5年度の収蔵品展では、天気をテーマにして、ふるさと歴史館館蔵資料の新しい魅力をご紹介します。（齊藤智美）



【図4】湯島天神 雪中之図

参考文献

窪田空穂『窪田空穂全集 第二巻 歌集Ⅱ』	1965年	角川書店
窪田章一郎『短歌シリーズ人と作品5 窪田空穂』	1980年	桜楓社
『小泉癸巳男・昭和震災復興記念 大東京百図絵』展図録	2012年	長野市立博物館分館信州新町美術館
三田村篤魚編『未刊随筆百種』第二巻	1976年	中央公論社
『新撰東京名所図会 本郷区之部』	1969年	睦書房
朝倉治彦編『日本名所風俗図会 3』	1979年	角川書店

卒業写真に写る人たち

下の写真は、明治44年（1911）の誠之小学校の卒業写真です。女生徒ばかりが写っているのは、当時の小学校高学年が男子部と女子部に分けられており、女子部の卒業写真だからです。最前列に座る白髯の男性が、当時の校長杉浦恂太郎です。



中條ユリ

前から3列目の中央（左から8人目）に写っている女子生徒は、中條ユリちゅうじょうと言います。建築家中條精一郎（1868-1936）の長女で、後の作家宮本百合子（1899-1951）です。大正5年（1916）に『中央公論』に発表した「貧しき人々の群」でデビューし、天才少女と謳われて多くの作品を発表しました。百合子は、誠之小学校の同窓会誌『誠之』にもたびたび文章を寄せ、母校を懐かしんでいます。

『誠之』40号（1939）に寄せた「藤棚」では、この卒業写真について「私たちの卒業記念写真は、その玄関前の砂利のところへ教室の腰かけを段々につんで、その上へ並んでとつた」と書いています。よく見ると写真の右下には、椅子が並べられている様子が見てとれます。一緒に写る同級生たちについては、「リボンをつけたお下髪に結つて、大いにすまして

ゐる女の子も何人かゐた」と書いていますが、写真ではほとんどの少女がりボンをつけている様に見えます。中には、巨勢春野（2列目左から4人目）の様に、卒業後の百合子の日記に名前が見られる同級生もいます。



巨勢春野

百合子は別の文章（「藤棚」（1947））において、「いつもシングルカラーをして薄い髯を生やした」音楽（唱歌）の田代先生を回想しています。



田代春次

先生は、「髯のついている口を大きくあけて、男のどら声のような声」で、音程正しく歌を教えたそうです。

百合子と同じ列の左から3人目に写っているのが、作家中戸川吉二（1896-1943）の妹、中戸川花です。第五次『新思潮』に参加し、『イボタの虫』で文壇に注目された吉二は、明治42年に誠之小学校を卒業しました。



中戸川花

吉二の息子中戸川宗一（1922-1963）は、後に文藝春秋社の編集者となり、宮本百合子も担当しました。百合子は、他の編集者に宗一のことを「原稿取らなきゃ刺し違えるような顔して、にらみつけてくる。ほんとに驚いた」（『月刊 噂』（1971））と話していたそうです。

宗一は、宮本百合子が叔母の小学校時代の同級生だったことを、知っていたのでしょうか。（加藤芳典）



「誠之小学校卒業写真（明治44年）」

令和4年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「ブンタを探せ! 展示室をスミからスミまで探検しよう」

◆7月16日(土)～8月31日(水) 参加者数……342人

特別展

「小石川植物園異聞 ー白山御殿跡いま・むかしー」

◆10月29日(土)～12月11日(日) 入館者数……2344人

◆12月4日(日) 会場:文京区民センター 参加者数……91人

「小石川植物園の植物学研究」

／川北篤氏(小石川植物園長・東京大学大学院理学系研究科教授)

収蔵品展

「杉田直樹と仲間たち 文三・潤一郎・茂吉」

◆2月11日(土)～3月19日(日) 入館者数……1537人

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト

応募総数256人

本選11月13日(日) 会場:跡見学園女子大学プロサラムホール

課題作家:森鷗外 本選出場者……17人 観覧者数……113人

◆歴史講演会

「一葉作品にみる明治の出版と挿絵」

／出口智之氏(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

1月22日(日) 会場:文京区民センター 参加者数……87人

◆史跡めぐり

「本郷・西片の樋口一葉が暮らした風景を辿る」

9月29日(木) 参加者数……21人

ミニ企画

◆4月27日(水)～6月26日(日)「大画像で発見!ー1枚の写真からー」

◆6月29日(水)～9月25日(日)「昭和の夏休み」

◆9月28日(水)～12月25日(日)「樋口一葉、奇蹟の舞台
～丸山福山町四番地～」

◆1月5日(木)～3月26日(日)「一高生の日記 杉田直樹と仲間たち」

史跡めぐり

◆「徳川ゆかりの地を訪ねて」10月20日(木) 参加者数……22人

◆「鷗外の足跡を訪ねてー坂道を巡るー」11月17日(木) 参加者数……15人

◆「小石川植物園の周辺を歩く」12月7日(水) 参加者数……21人

ワークショップ

「みんなの名所ものがたり エピソード活用編」

◆3月19日(日) 参加者数……4人

森鷗外没後100年記念シンポジウム

◆「読み継がれる鷗外」

平野啓一郎氏・青山七恵氏・平出隆氏・ロバート キャンベル氏

7月3日(日) 会場:東京大学伊藤謝恩ホール

協力:文京区立森鷗外記念館

参加者数……会場81人、オンライン参加……312人

*新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、12月15日(木)～12月20日(火)は休館し、事業を中断した。



歴史教室



特別展



朗読コンテスト



ミニ企画



歴史講演会



収蔵品展

令和5年度の催し

*それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページおよび「区報ぶんきょう」にてお知らせします。
ホームページ：https://www.city.bunkyo.lg.jp/bunka/kanko/spot/museum/rekishikan



小・中学生のための歴史教室

「ブンタを探せ! 歴史館クイズラリー」

7月27日(木)～8月31日(木)

歴史館内の展示を見ながら、昔の暮らしや道具に関するクイズにチャレンジします。

特別展

「湯島の地に聖堂ありー江戸・東京の学び舎と文京」

10月28日(土)～12月10日(日)

「全国藩校サミット文京大会」事業の一環として、幕府の設置した昌平坂学問所(現在の史跡・湯島聖堂)の歴史・文化などを紹介します。

収蔵品展

「ぶんきょうの空模様ー天気と収蔵庫ー(仮)」

2月10日(土)～3月17日(日)

ふるさと歴史館に収蔵されている資料の中から、「天気」にスポットをあてて様々な資料を紹介します。

史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、史跡等をご案内します。区報等で募集します。

参加費 保険40円程度・入館料等実費。

文化人顕彰事業 朗読コンテスト

本選 11月5日(日)13時～16時

会場 跡見学園女子大学プロッサムホール

文京ゆかりの作家の作品を朗読。今年の課題作は宮沢賢治「よだかの星」「なめとこ山の熊」「注文の多い料理店」「銀河鉄道の夜」「グスコブドリの伝記」「さるのこしかけ」「やまなし」です。コンテスト形式で優秀者を選び表彰します。

※参加者・観覧者募集の方法等は、ホームページなどでお知らせします。

ワークショップ

実施日:未定

会場:未定

常設展示ボランティアガイド【現在休止中】

ふるさと歴史館ボランティアガイドが、毎週土・日曜日、13時から17時まで常設展示の解説を行います(申込不要・無料)。上記日時以外のご希望も受付けています。3週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

レファレンス【現在休止中】

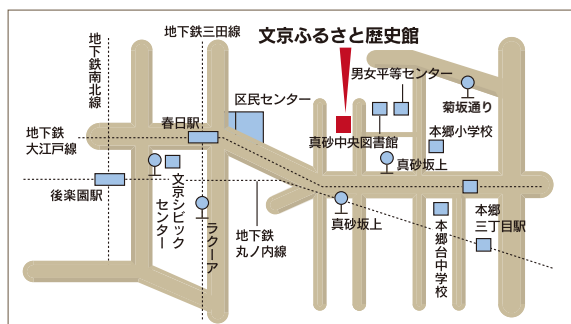
毎月第2・4木曜日13時30分から16時30分まで、館内1階レファレンスコーナーにて、ご質問にお答えします。

令和5年7月から10月にかけて、トイレ洋式化工事をおこないます。工事期間中は別フロアのトイレをご使用いただく場合がございます。工事にもともなう臨時休館や工事音などご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

詳細はホームページでお知らせいたします。

利用のご案内

- ◆開館時間：午前10時から午後5時まで
- ◆休館日：月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日)
くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料：一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65歳以上無料
*特別展は別に定めます
- ◆交通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69「真砂坂上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスBーぐる「菊坂通り」から6分
「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分
- ◆ホームページ：https://www.city.bunkyo.lg.jp/bunka/kanko/spot/museum/rekishikan



文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号
電話(03)3818-7221